

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月12日現在

機関番号：32507

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730519

研究課題名（和文） 青年期の生き方態度に感謝がもたらす変化

研究課題名（英文） Change in Attitude toward Life Related to Gratitude in Adolescence

研究代表者

池田 幸恭（IKEDA YUKITAKA）

和洋女子大学・人間・社会学系・助教

研究者番号：70523041

研究成果の概要（和文）：本研究では、「感謝」を「恩恵を与えられていると感じること」ととらえ、青年期の生き方態度に感謝がもたらす変化について検討した。大学生への質問紙調査、10代から60代までへのウェブ調査を実施し、ウェブ調査では与えることの喜びと人生満足度という2種類の生き方態度を取りあげた。その結果、青年期では生き方態度に感謝が直接的に変化をもたらすことは成人期以降と比べて少ないが、素直に感謝できないという感覚が自らの生き方を問い直すことにつながり、そこで生じた視点の変化に伴い生き方態度も変化していくことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify adolescents' change in attitude toward life related to gratitude, that is, feeling someone or something had given them a valued benefit. Undergraduate students completed a questionnaire survey and individuals aged 15-69 years completed an online questionnaire survey consisting of the Satisfaction with Life Scale and items on pleasure in giving and feelings of gratitude. Analysis of the responses indicated the following main results. Feelings of gratitude directly changed attitude toward life less in adolescence than in adulthood. Among adolescents, resistance to feelings of gratitude did prompt them to query their attitude toward life, and this change in their viewpoint could in turn change their attitude toward life.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：感謝、生き方態度、青年期

## 1. 研究開始当初の背景

青年期は、これまでの人生を総括して、今後の生き方を模索する時期である。価値観の多様化が進む現代、青年が自らの生き方を模

索する必然性が高まると同時に、その困難さも増してきている。その中で、青年期の生き方態度に関する知見を示すことは意義があると考えた。

ところで、感謝は、心理学のみならず、教育学、社会学、哲学、倫理学、宗教学などの諸領域において人間にとっての重要性が指摘されている。したがって、青年期の生き方態度に感謝は変化をもたらすことが予想された。

研究代表者は、これまで青年期における親に対する感謝の発達的变化に焦点を当てた研究を進めてきた。しかし、青年が感謝を感じる相手は親だけではなく、友人や恋人、あるいは自然への感謝もみられるといえる。したがって、親に対する感謝だけではなく、感謝を包括的に研究する必要があると考えられた。本研究では、「感謝」を「恩恵を与えられていると感じること」ととらえ、青年期の生き方態度に感謝がもたらす変化について検討することにした。

## 2. 研究の目的

本研究では、青年期の生き方態度に感謝がもたらす変化について明らかにすることを目指した。はじめに、青年にとっての感謝の心理的意味を検討した上で、感謝を感じる対象の生涯発達の変化から青年期の感謝の特徴を明らかにすることを試みた。さらに、横断的研究では検討できない“変化”を検討するために、ウェブ調査による短期縦断的研究を行った。

また、ウェブ調査では、感謝との関係が予想された「与えることの喜び(自分の持っているものを人に与えることで自分が喜びを感じるという態度)」と「人生満足度」という2種類の生き方態度に着目した。

具体的には、次の3つの目的に沿って研究を進めた。

第1に、青年にとって感謝はどのような意味を有しているのかを明らかにする。

第2に、感謝を感じる対象の発達的变化を明らかにする。

第3に、感謝と与えることの喜び、および人生満足度との関係を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 感謝の心理的意味の探索的検討

#### ① 女子大学生における感謝の心理的意味

2010年12月から2011年1月にかけて、千葉県の私立女子大学生219名に質問紙調査を実施し、感謝を感じる程度と理由、比喻生成法と感謝の対概念に関する回答を求めた。

#### ② 大学生の生き方態度に感謝がもたらす変化

2012年1月に茨城県の大学生122名に質問紙調査を実施し、「今の自分があることに感謝を感じることに」焦点を当て、生き方態度に感謝がもたらした変化について自由記述を求めた。

### (2) 感謝を感じる対象の発達的变化

関東圏在住の10代(15歳以上)、20代、30代、40代、50代、60代それぞれ300名(男性150名、女性150名)の合計1800名に、2012年9月上旬にウェブ調査を実施した。感謝を感じる対象20項目について、感謝の気持ちを「まったく感じていない」から「非常に感じている」までの5件法で回答を求めた。父親や母親、友だちといった具体的な人物への感謝10項目については、「いない・思い浮かばない」という選択肢も設けた。

あわせて、与えることの喜び尺度8項目(自主作成)へ5件法、人生に対する満足度尺度(角野, 1994)へ7件法(以下、人生満足度)、S-ESDS(三好他, 2003)の下位尺度「社会的望ましさ」から抜粋した3項目へ5件法で回答を求めた。

### (3) 感謝と与えることの喜びおよび人生満足度との関係

(2)の20代から60代までの回答者へ、2013年2月上旬にウェブ調査を継続して実施した。その結果、合計1141名から回答が得られた。調査内容は、(2)と同一の内容に加え、初回調査と継続調査の間に体験したライフイベントを尋ねる38項目、および感謝を規定する心理的要因を尋ねる24項目に回答を求めた。

## 4. 研究成果

### (1) 青年の生き方態度に感謝がもたらす変化 ① 感謝の心理的意味の探索的検討(2010年度・2011年度)

女子大学生の多くは父親や母親、友だちなど広い対象に感謝を感じていること、さらに感謝の心理的意味は「感情状態」「他者への感情」「感謝の特徴」「引き起こされる行動」「関係への影響」というカテゴリーから理解できることが示された。また、感謝の心理的イメージとしては「あたたかさ」が、対概念としては「無関心」が最も記述数が多かった。

さらに、「今の自分があることに感謝を感じることに」が直接的に生き方態度に変化をもたらすだけでなく、視点の変化が生じることで感謝を感じるようになると共に生き方態度も変化している場合があることが示唆された。

### ② 感謝を感じる対象の発達的变化(2012年度)

回答に不備がみられた回答者と、「社会的望ましさ」3項目すべてに「非常にあてはまる」とした回答者を以降の分析から除外した。

感謝を感じる対象20項目の得点に、年代と性別を要因とした分散分析と多重比較を行った。その結果、抽象的な対象(日常生活のささいなこと、自然の恵み、いのちのつながりなど)への感謝得点は、男女共に、概ね

10代あるいは20代で最も小さく、60代で最も大きかった。抽象的な対象への感謝10項目の得点を合計し項目数で除したものを「抽象的な対象へ感謝を感じる傾向」として、男女別の年代差を図1に示した。

発達に伴い、具体的な人物だけでなく、抽象的な対象への感謝をより強く感じるようになることが示された。

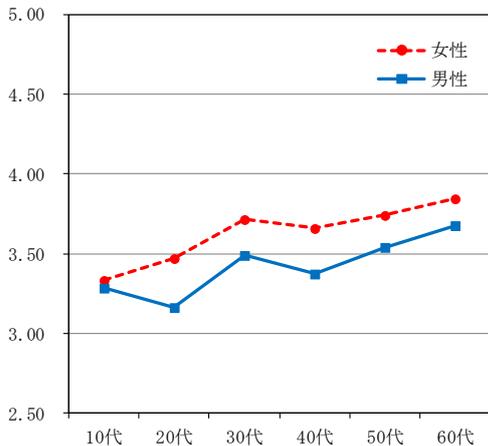


図1 抽象的な対象へ感謝を感じる傾向の男女別の年代差

### ③ 感謝と与えることの喜びおよび人生満足度との関係 (2012年度)

感謝と与えることの喜びおよび人生満足度との関係を検討した結果、主に次の3つの成果が得られた。

第1に、抽象的な対象へ感謝を感じる傾向と与えることの喜び、ならびに人生満足度との関係について、それぞれ交差遅延効果モデルと同時効果モデルの両方で年代別、男女別に検討した。その結果、男性では、与えることの喜びには両モデルで共通する影響は得られなかったが、20代と40代で人生満足度から感謝傾向への影響が、30代で感謝傾向から人生満足度への影響がみられた。女性では、40代と50代で感謝傾向から与えることの喜びへの影響が、40代から60代で感謝傾向から人生満足度への影響がみられた。感謝と生き方態度との関係には男女差がみられ、特に女性では感謝が与えることの喜びと人生満足度を促すことが示された。

第2に、継続調査時の抽象的な対象へ感謝を感じる傾向を目的変数に、初回調査時の抽象的な対象への感謝を感じる傾向、継続調査時の社会的望ましさ得点、体験したライフイベントの有無(ダミー変数)を説明変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果、20代男性では「自分に子どもが生まれた」、30代男性では「自分が大きな病気やけがをした」、40代男性と60代女性では「子育ての大変さを実感した」という体験が感謝を感じる程度を高めていた。その一方で、50

代女性では「経済状態が悪化した」という体験が感謝を感じる程度を低減していた。生涯発達の中で体験するライフイベントによって、感謝を感じる程度が変化することが示された。

第3に、感謝を規定する心理的要因として、20代では「他者による配慮」「支えの充足」「独力志向」「他者の助力は当たり前でないという実感」という4因子が見出されたが、30代、40代では「恩恵のかけがえのなさ」という1因子にまとまり、50代では「他者とのつながりの自覚」「他者へかけてきた負担」「他者からの承認」という3因子に分化し、60代では再び「恩恵のかけがえのなさ」という1因子にまとまった。20代の「独力志向」は、人生満足度と負の関連を示した。そして、20代の「他者の助力は当たり前でないという実感」および50代の「他者へかけてきた負担」は、与えることの喜びと正の関連を示したが、人生満足度とは負の関連を示した。人生満足度と負の関連を示す要因がみられることから、20代の青年期と50代の中年期には素直に感謝できないという感覚が強まるが、いずれも発達に伴い感謝を感じることの葛藤を解消していくことが推察された(図2)。

以上より、青年期では生き方態度に感謝が直接的に変化をもたらすことは成人期以降と比べて少ないが、素直に感謝できないという感覚が自らの生き方を問い直すことにつながり、そこで生じた視点の変化に伴い生き方態度も変化していくことが示唆された。

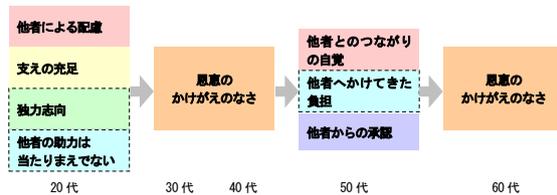


図2 感謝を規定する心理的要因の発達の变化

注1: 破線で囲んだ要因は、人生満足度と負の関連を示した。

### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究において、国内外で未検討であった感謝の生涯発達の变化に関する知見が示された成果は大きい。特に、青年期と中年期は感謝を素直に感じにくい時期であり、老年期には抽象的な対象への感謝を中心に感謝を感じる程度が大きくなることが示された。

さらに、与えることの喜びや人生満足度に感謝が影響を及ぼすことが実証的に示された。従来の感謝に関する研究でも、感謝の肯定的効果が中心に論じられてきた。これに対して、本研究では、素直に感謝できないという感覚が自らの生き方を問い直すことにつながる可能性も示唆された。

このように感謝を感じることに加え、素直

に感謝できないという感覚の発達の意義が示唆された成果は重要である。

### (3) 今後の展望

本研究では、青年期の生き方態度に感謝がおよぼす変化について検討した。本研究の今後の展望について、次の3点にまとめる。

#### ①感謝と生き方態度の相互影響

本研究では、感謝との関係が予想された与えることの喜びと人生満足度という2つの生き方態度を取りあげた。この2つ以外の生き方態度にも、感謝が変化をおよぼす可能性があると考えられる。また、人生満足度が感謝に影響をおよぼすことが、本研究でみられた。このように、感謝が生き方態度に変化をおよぼすと同時に、生き方態度が感謝を促すといった相互影響について検討する必要がある。

#### ②感謝が生き方態度におよぼす変化のメカニズムとプロセス

今回の研究では、感謝が生き方態度におよぼす変化について、質問紙調査による検討を行った。感謝が生き方態度におよぼす変化のメカニズムやプロセスを理解するためには、面接調査などによって変化の文脈を検討する必要がある。

#### ③個別の感謝への着目

今回の研究では、全般的な感謝が生き方態度におよぼす変化について扱った。しかし、感謝を感じる対象によって、その発達的变化、与えることの喜びや人生満足度との関係は異なることが示された。したがって、研究代表者がこれまで検討してきた親に対する感謝だけではなく、配偶者に対する感謝や運命に対する感謝といった個別の感謝へ着目し、生き方態度へおよぼす変化をより具体的に明らかにすることが必要である。

感謝を感じる対象の発達的变化、感謝と与えることの喜びおよび人生満足度との関係については、学術雑誌への投稿準備を現在進めている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①池田幸恭、女子大学生における感謝の心理的意味の探索的検討、和洋女子大学紀要、査読有、52集、2012、107-117

[学会発表] (計1件)

- ①池田幸恭、感謝の発達的变化と与えることの喜びを感じる生き方および人生満足度との関係、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月15日、明治学院大学白金キャンパス(東京都)

[図書] (計1件)

- ①池田幸恭、他、丸善出版、発達心理学事典、2013、256-257

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

池田 幸恭 (IKEDA YUKITAKA)

和洋女子大学・人間・社会学系・助教

研究者番号：70523041

#### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

#### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：